

紛争解決教育における映像教材開発のための試論 アニメーション『みんなが HAPPY になる方法』の事例より

高部優子 横浜国立大学都市イノベーション学府博士課程後期

1. はじめに

筆者は、非暴力による紛争解決の理論やスキルの教育を目的としたアニメーション教材『みんなが Happy になる方法』¹を開発した。『みんなが Happy になる方法』は、3編のアニメーション『ジョニー&パーシー』、『鬼退治したくない桃太郎』、『Happy になる5つの方法』が含まれている。本稿では、この映像教材を使用した授業やワークショップ参加者のアンケートを分析し、紛争解決教育におけるアニメーション教材の効果と課題を考察する。

2. 研究の背景

9・11 事件以降、アメリカはアフガニスタンを攻撃し、イラク戦争に突入した。しかし「テロとの戦い」はいまだ終結せず、世界は混迷の一途をたどっている。これは、紛争は暴力では根本的に解決できないことを示しており、非暴力の方法のみ解決の可能性が開かれると考える。

紛争当事者との対話、議論の経験から、紛争を転換するトランセンド(超越)法(Transcend Method)を編み出した平和学者ヨハン・ガルトゥングは、1941年から3度の戦争を引き起こしたペルー・エクアドルの国境紛争について、エクアドルの大統領に「自然公園のある2国家ゾーン」の提案をし、1998年、両国はこれを一部採り入れる形で平和条約を結んだ(ガルトゥング 2014, pp94-96)。これは紛争解決理論の有用性を示している一つの事例である。

紛争解決(conflict resolution)とは、個人、集団、国家間の紛争の背景を探り、誰が(何が)、何故対立しているのか、お互いの要求は何かを深く考え、自他を尊重しつつ、コミュニケーションを駆使して、多くの解決方法の中から最も適した非暴力の方法で紛争を解決しようとする理論とスキルの総称である。紛争解決教育は、その理論やスキルを学ぶものである。

アメリカでは1970年代から紛争解決教育が始まり(名嘉 2011)、イギリスでは初等教育にピア・メディエーション(仲間による調停)がカリキュラムに組み込まれている(池島 2010)。日本では、紛争解決教育を一つの柱とした包括的平和教育(リアドン 2005)の広がりや、小学校4年生にピア・メディエーションを導入する試み(池島・吉村 2013)など

¹ 『アニメみんなが Happy になる方法 関係をよくする3つの理論』(平和教育アニメーションプロジェクト 2012)は、3編のアニメーションが入ったDVDと書籍。3編のアニメーションの内容については、4「アニメーションの概要」にある。

があるが、学校教育において紛争解決教育は位置づいていない。しかし、学校で、あるいは社会に出てからも、いじめや職場の人間関係、労働問題などの身近な問題から国際紛争まで、解決が困難だと思われる問題に直面する日本社会においても、非暴力の解決方法の理論とスキルを学ぶことは、問題の仕組みに対して新しい視点を持ち、建設的な行動が可能となるため、必要であると考え。そのため、学校教育でも、社会人でも容易に学習できるような、導入、実践しやすい紛争解決教育教材の開発が必要である。

日本でも近年、多くの紛争解決に関する教材や実践集がでてきているが、映像教材はごく僅かで、アニメーションはない。映像教材は、汎用性があり、機材さえあれば誰もが手軽に使用できるので、紛争解決教育の導入や実践がより行いやすいと考える。また、特にアニメーションは親しみやすく、制作時にストーリーやキャラクターなどの設定が自由にできるので、状況説明や教材の意図を明確に伝えやすい。

筆者は、ガルトウングのトランセンド法（ガルトウング 2000、2003）や紛争解決教育の実践（クライドラー1997）等に基づき、紛争解決のスキルを伝える 3 編のアニメーションと、紛争解決の理論やこれらのアニメーションを活用した授業実践例等が書かれている『みんなが HAPPY になる方法』（平和教育アニメーションプロジェクト 2013）をプロデューサーとして制作した。

本稿では、ガルトウングのトランセンド法の理論枠組みで、紛争解決教育で育成するスキルと理論を具体的にし、中高、大学生と社会人向けのこれらのアニメーションを使用した授業やワークショップのアンケートによる質的調査から、3 編のアニメーションの紛争解決教育における教育効果と課題を明らかにしたい。

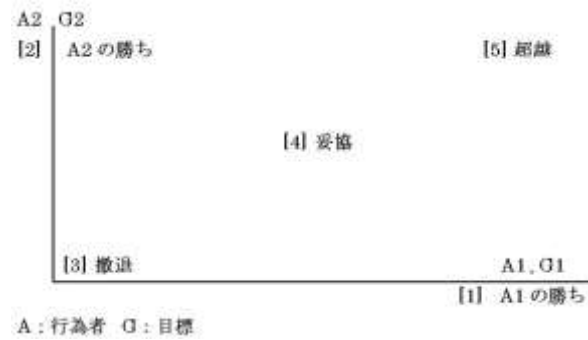
3. ガルトウングのトランセンド法に基づいた紛争解決教育

ガルトウングは、外交官、国連職員、NGO の人びと等に、当事国と対話をして紛争解決できる紛争ワーカー／平和ワーカー（以下「平和ワーカー」）の養成を行っている。このプログラムで使用されているテキスト²を参考にし、伊藤のトランセンド法の説明を引用する³。

² Johan Galtung (2000) *Conflict Transformation by Peaceful Means (the Transcend Method) Participants' Manual, Trainers' Manual*. United Nations. この簡略版（日本語訳）が、『平和的手段による紛争の転換【超越法】』（2000）。

³ 伊藤武彦（2003）『ガルトウング平和学入門』ガルトウング，ヨハン・藤田明史編著 pp. 18-23. 法律文化社 図もそこからの引用。

トランセンド法とは、二者の紛争当事者の目標を乗り越えた新たな創造的な解決法である。従来多くの紛争解決法と異なる点は、紛争を妥協ではなく転換し、超越することである。[1][2]の一方の目標だけ実現するやり方、[3]の対立を放置するなどの撤退、[4]の両者の目標を半分ずつ実現



する妥協ではない、第[5]の点がトランセンド法による解決点である。平和ワーカーは、第三者として紛争を調停・仲介するが、まず対立する当事者と1対1で対話を行う。対話を行うことにより、持続可能な、双方が納得する解決法を創出し、紛争を転換・変形する。トランセンド法で重視されるのは、共感、非暴力、創造性である（伊藤 2003）。

以上のように、筆者は、トランセンド法は紛争を転換させるので、紛争の構造自体を変えることになり紛争が再燃しづらいこと、トランセンド法により多くの紛争を解決した実績があることなどから紛争解決教育に有効であると考え、トランセンド法の理論から小学校高学年と中学生を対象にした紛争解決映像教材で育成する理論やスキルを考察した。対象を小学校高学年と中学生にしたのは、ピア・メディエーションのスキルの導入は小学校4年生後半以降から可能という指摘と（池島 2010）、その学年を対象にしたアニメーション教材でも、授業の組み立て方で高校や大学でも使用可能なのではないかと考えたからである。

小学校高学年・中学生の紛争解決教育で育成する理論やスキルは基本的なものであり、第1に、紛争は話し合いで解決できることを知る、第2に、建設的に話し合う方法を学ぶ、第3に、紛争の解決方法は複数あり、創造的な解決方法（トランセンド法）があることを知る、と教育目標を設定した。

トランセンド法で重視される共感は、第2点の建設的に話し合う方法で、自分の気持ちを表現したり、相手の話をよく聴く、傾聴の態度などを学ぶことで養われる。非暴力については、第1～第3点すべてに、話し合いのみが紛争の解決方法であるという非暴力のメッセージが隠れて発信される。創造性については、第3点にある。

4. アニメーションの概要

上記の基本的な理論やスキルを育成するために、先に述べた3編のアニメーションのシナリオを作成した⁴。

⁴ 清泉女子大学大学院で松井ケティ教授の指導の下、紛争解決の理論研究を行いながら、包括的平和教育の授業参加者有志でシナリオのアイデアを出し合った。

第1点、第2点については、ハワイに伝わるホーポノポノという集団での話し合いを、紛争の転換や和解の手法と捉えなおした理論（ガルトゥング 2005）を参考にし、鬼退治が当然とされている桃太郎を、ホーポノポノの手法を学びながら、鬼と村人との話し合いをすすめていくというストーリーにし、解決不可能に思える紛争も話し合いが有効であるという気付きと、建設的な話し合いの方法を学ぶという教育効果を期待した。

また、紛争時の話し合いにおいて、他人を批判しがちなコミュニケーションではなく、「私」を主語に自分の気持ちを伝え、お互いの気持ちを理解し合い、対立が激化しないようなコミュニケーションの方法である私メッセージ（クライドラー1997）を、傾聴の注意点も加え、ペンギンとアザラシの餌の取り合いという設定で制作し、第2点の建設的に話し合う際の自らの気持ちの表現方法、相手の話を聞く方法を提示した。

第3点については、発表会の劇を「みにくいあひるの子」と「うらしま太郎」のどちらにするかというホームルームでの話し合いで、多数決ではなくトランSENDするという、生徒に身近な設定にし、トランSEND法を理解しやすくした。

アニメーションの概要は以下である。

タイトル	『ジョニー& パーシー』 	『鬼退治したくない 桃太郎』 	『Happyになる 5つの方法』 
長さ	約7分	約10分	約7分
ストーリー	ペンギンのジョニーとアザラシのパーシーが食料を取り合う ⁵	鬼退治したくない桃太郎が、鬼と村人の話し合いを行う ⁶	発表会でやりたい劇が2つある、学校のホームルームの話し合い ⁷
紛争解決の理論・スキル	私メッセージ	ホーポノポノ	トランSEND
制作手法	平面アニメーション 虫プロダクション株式会社に依頼 ⁸	人形を少しずつ動かすストップモーションアニメ ⁹	平面アニメーション作成ソフト、フラッシュ（Adobe）による作画 ¹⁰

⁵ シナリオ…堅川遼一

⁶ シナリオ…高部優子

⁷ シナリオ…末木千尋、鳥羽悦郎、日高夢

⁸ 演出…秦義人、キャラクターデザイン・作画監督…小野隆哉、美術監督…中村嘉博

⁹ 演出…渡辺健一、制作…高村早央里、林綾美、本田雄己、古沢明子、高部優子、三重野豊他

¹⁰ 演出・作画…渡辺健一、背景…小野彩子

アニメーションを3編にしたのは、学校でも導入しやすくするために1回から数回で完結する教材にすることと、3つのスキルや理論を入れたためである。3編のアニメーションは、続けて見ても飽きないよう、人形アニメーションと平面アニメーションなど異なる制作手法で変化をつけた。また、1つのアニメーションでも紛争解決教育の授業が成立できるような内容にした。時間は7分～10分と、授業で使いやすい長さにした。

5. 研究の方法

学校教育向けに制作したこの映像教材は、予想に反して社会人からの講演、ワークショップ依頼も多かった。そこで、筆者、筆者以外が実施した、中学、高校、大学、社会人を対象とする、『みんながHappyになる方法』を使用した授業やワークショップのアンケートを分析し、映像教材としてのアニメーションは適切か、また、紛争解決教育におけるこの映像教材の効果と課題を検証する。なお、映像制作が主目的だったため、すべてのアンケートが同じ質問事項でなく、筆者以外が実施した授業やワークショップは、筆者の実施したワークショップと実施方法に違いがあり課題があるが、得られたテキストデータを課題を踏まえ考察したい。

6. 実施概要（実施日は前後するが、対象者の年代順にした）

	対象	実施日	実施者	実施内容
中学生	東京都区立中学校1年生 人権学習 クラスA 29人 (男14人、女15人) クラスB 31人 (男15人、女16人)	2012年 7月 10日	田中圭子 ¹¹	アイスブレイキング、『鬼退治したくない桃太郎』、ホーポノポノの説明後、アンケート記入（「アニメはどうでしたか」「感想」「今日学んだことで今後にかきたいこと」）
高校生	東京都内私立高校3年生 夏の講座 21人（男9人、女12人）	2014年 7月 24日	筆者	ワークショップ形式。アイスブレイキング、『ジョニー&パーシー』、私メッセージの説明、『Happyになる5つの方法』、トランセンド法の説明、『鬼退治したくない桃太郎』、ホーポノポノの説明後、アンケート記入（自由記載）

¹¹ NPO法人日本メディエーションセンター代表理事（現在、一般社団法人メディエーターズ代表理事）

大学生	D 大学文学部教育学科 新入生オリエンテーション 合宿体験講座 71 人（男 27 人、女 44 人）	2012 年 4 月 14 日	杉田明宏	ワークショップ形式の入門講座。説明、アンケート A 記入、『Happy になる 5 つの方法』、アンケート B 記入、説明（杉田他 2012）
社会人	京都の団体 参加者 女 33 人 （内アンケート回収 19 人）	2011 年 12 月 19 日	筆者	ワークショップ形式。アイスブレイキング、『ジョニー&パーシー』、私メッセージの説明、『Happy になる 5 つの方法』、トランセンド法の説明、『鬼退治したくない桃太郎』、ホーポノポノの説明後、アンケート記入（自由記載）
	東京都内の平和団体 20 人（男 8 人、女 12 人）	2013 年 11 月 9 日	筆者	
	神奈川県生涯学習 4 回連続講座の 3 回目 9 人（男 5 人、女 4 人）	2015 年 10 月 19 日	筆者	

7. アンケート結果

実施概要にまとめた授業やワークショップのアンケート結果から、7-1 では、映像教材としてのアニメーションは適切だったのか、社会人に対してもアニメーションは教材として受け入れられるのかを考察する。7-2 では、この映像教材の紛争解決教育の効果、7-3 では、課題を考察する。

7-1. 教材としてのアニメーション

中学生のアンケートは、アニメーションが面白かった 34 人 (57%)、まあまあ 21 人 (35%)、つまらない 2 人 (3%)、無回答 3 人だった。自由記載の感想にもアニメーションの言及が多く、「アニメーションで学習することはあまりないのでとても新鮮でよかったです」「アニメを見ながらだといんしょうに残るし、おもしろくおぼえられて、ケンカや対立があってもこうすればいいのかとわかりました」といった感想があり、教材としての効果があったと言える。

高校生も「アニメで学べてわかりやすかった」「アニメがすごくかわいかった」という肯定的な感想が 5 人からあった。

杉田は、「大学新入生たちも楽しんで視聴しており、本作品は、アニメーション文化に馴染んでいる大学生年齢にとっても有効であるという印象を受けた」としている（杉田 2012）。

社会人にも、「とてもわかりやすく、見やすく作られていてよかった」「DVD は絵+人形

がとにかくかわいくて「平和学習」＝堅いというイメージがなく肩の力を抜いて勉強できてよかった」などの感想があり、特に20代後半から40代が多かった京都の団体では、「子育て真っ最中の若い人、世代に受け入れやすい内容だったと思う」「まずは親が見てこの解決方法を学ぶことが必要だと思う」「子どもと見たい」などの感想があり、大人でもアニメーション教材は受け入れられるということが示された。

7-2. 紛争解決教育における『みんながHappyになる方法』の効果

先に述べたように、紛争解決教育で育成する基本的な理論やスキルは、第1に、紛争は話し合いで解決できることを知る、第2に、建設的に話し合う方法を学ぶ、第3に、紛争の解決方法は複数あり、創造的な解決方法（トランセンド法）があることを知る、とした。

第1点については、話し合いが紛争解決に重要であるという感想が、どの年代にも見られることから、効果があったと言えよう。

第2点の、建設的な話し合いについての気づきについては、中学生28人から以下のような記述があった。

「相手がどんな考えでも話を最後まで聞いて、悪かった所と良かった所を考えたいと思いました」

「自分の意見も大切だけど相手の意見も大切だと思った」

「勝手に、人の印象で決めるのではなく、相手の考え方などを知るために、話し合っ、争いごとをなくしたいと思います」

高校生からは「自分はコミュニケーションが苦手で、人をさげ、もめ事を嫌い、自分の意見は一切出さなっていました。でも今回の授業で、人とのコミュニケーションがいかにか大切にということが分かったと思う」という感想があり、社会人からも「平和的に話し合いの中で解決できることに確信を持つことができた」「ひとりひとりが自分の思いを他に向かって伝える機会がまずあることが大切だとも感じました。自分の意見が、直接取り込まれなくても、自分の思いを人に伝えられた、できれば一度は、わかってもらえたという気持ちそれぞれの中でひとつ、気持ちが落ちるところがあるように思います」などという感想があった。

以上のことから、第2点の建設的な話し合いを学ぶことができる映像教材だったと言える。

第3点については、トランセンド法を説明した『Happyになる5つの方法』を視聴したアンケートには、解決方法は1つではなく複数あるという気づきの感想が見られた。杉田が行った、大学生へのアニメーション視聴前と視聴後のアンケート分析では、葛藤対処スタイルのタイプが「統合」の人数が優位に増加、「回避」の人数が優位に減少し、全体の48%にプラスの効果があり、70%に葛藤解決方略の点数の向上が見られ、事後の感想文は

記入者の 72%が肯定的評価を行い、「事後の自由記述の感想文には、解決方法は多数決だけではない、答えは一つだけではない、話し合うことで発想や違った意見が出る、柔軟な発想が重要など、さまざまな気づきが記されており、今後に役立てたいという意欲も記されている」(杉田 2012) としていることから、第 3 点についても効果があったと言える。

以上のことから、『みんなが Happy になる方法』は、話し合いの重要性、建設的な話し合い、トランセンドなど複数の解決方法があることについて理解され、紛争解決教育の効果があったと言える。また、「短時間の教育的介入でも効果が大きいことが実証された」(杉田 2012) ことから、映像教材は紛争解決教育に有効であったと言える。杉田も指摘しているように、授業やワークショップでは講師からのコメント、参加者同士の話し合いなどのアニメーション以外の要素がアンケート結果に含まれるが、アニメーション自体の評価からも 3 編のアニメーションは紛争解決教育の効果があったと言えるであろう。

7-3. 紛争解決教育における『みんなが Happy になる方法』の課題

『みんなが Happy になる方法』は、参加型の学習活動を提案している。筆者も、3～4 人のグループにおいてワークショップを行う形をとっている。社会人から「自己肯定感が得られて良かったです」という感想があったが、建設的な話し合いを学び、グループの中で自分の意見を十分聞いてくれた、人とコミュニケーションがとれたという実感を得ることが出来るなど、グループワークは有効である。しかし 1 人の高校生の「グループワークは最悪だった」という感想は真摯に受け止めなければならない。グループワークは、その場の雰囲気、参加者の背景などに十分注意して行わなければならない。同じワークショップで「人と話せてよかった」という感想があるので、一概にワークショップを行うべきではなかったと判断はできないが、その高校生がグループワークの経験がなく馴染まなかっただけで、トレーニングを積んでいけば解決するのか、参加自体に無理がある状況だったのか判断が難しいが、グループワークに参加しないことも保障しなければならないであろう。またワークショップが行えるかどうか判断が難しい場合は、『みんなが Happy になる方法』はアニメーション 1 編の視聴のみでも成立するように制作したので、アニメーションを見せるだけでも紛争解決の基本的な理論やスキルは伝えることが出来るであろう。

『みんなが Happy になる方法』の紛争解決教育の基礎的な理論やスキルについての効果は認められ、筆者が行った講演やワークショップの印象からも好意的な反応が多かった。しかし、実生活や政治や国際問題で紛争解決のスキルが適用できるかとの疑問も、社会人から寄せられた。

「色々な場面で紛争を抱えることが多い中、解決に向けて「そうありたい」と思うことが多々ありました。しかし、向き合い、話し合うということそのものが難しいことが多いとも思っています」

「政治問題は難しいのでは？」

「使いたいけど、周りが年寄りだから難しいかもしれない」

「国際紛争で生かせればとてもよいと思うが、私たちのような「一市民」は何ができるか、悩みがますます深くなった」

「同じ立場で話し合いにのってこない人との対話は難しいと思いました」

これらの疑問は、特に東京都内の平和団体に多く見られ、筆者の講演などの印象から大学生から見られ、年齢が高くなると多くなるように感じられる。このことから、若年層には『みんなが Happy になる方法』が射程とした紛争解決の基礎的な理論、スキルが有効であるが、複雑な紛争を抱えたり、政治、国際問題への関心、関わりが多い社会人には、さらに一歩進んだ教材が必要だと考えられる。

政治問題や国際紛争に紛争解決のスキルが使えるかどうかの疑問には、ペルー・エクアドル国境紛争におけるガルトウングの経験のような、実際に理論を使って紛争解決をした事例を示す教材が有効なのではないだろうか。また複数の事例があったほうが効果的であろう。

話し合いにのってこない人、話し合いが出来ない人との紛争解決については、先に挙げた平和ワーカーのプログラムで使用されているテキストに、平和ワーカーの対話への態度として、同じテーブルにのせようとせず、いつか話し合いのテーブルについてそれぞれの側がミーティングをできるよう準備することが重要だとしている。

また、仮説として提案されている「創造性の公式」を引用する(ガルトウング 2000, p44)。

「考え方、発言、そして行動における創造性の基礎は？」

- A 現象がブロックされていて閉鎖状態にあるということを明確にする。
- B その現象の文脈の中で明確にすること
 - ・定数とみなされ、かつて考慮の対象にされなかった要因を見出すこと
 - ・その要因を変化させ、心のなかで実験してみること
 - ・仮設—それが、現象のブロック状態を解き、閉鎖状態を開いていくものであること。
- C この仮説を現実社会で試してみることに」

この公式は、複雑な紛争において有用だと考えるが、これを活用するには、あるいは先に述べた平和ワーカーの態度を理解するには、紛争の理論や平和、平和の対立概念である暴力についても学ぶ必要があり、時間も必要となる。

以上のことから、平和ワーカーのプログラムは紛争解決教育を深めるには有効ではあるが、そのままでは紛争解決に馴染みがなく、文化も異なる日本に導入するのは難しい。平和ワーカーのプログラムを参考に日本の大学生、社会人向けに紛争解決教育の到達点を作成した。

(表1 紛争解決教育の到達点)

① 対話の理解
1. 紛争は話し合いで解決できることを知る。 2. 建設的に話し合う方法を学ぶ。
② トランセンド法の理解
1. 紛争は紛争の解決方法は複数あり、創造的な解決方法（トランセンド法）があることを知る。
③ 紛争の理解
1. 紛争の要素を理解する ¹² 。 2. 紛争解決の理論、スキルは、個人、集団、国家でも応用できることを理解する。
④ 平和・暴力の概念の理解
1. 非暴力の重要性を理解する。 2. 直接的暴力、構造的暴力、文化的暴力 ¹³ を理解する。 3. 消極的平和・積極的平和 ¹⁴ を理解する。
⑤ トランセンド法の応用
1. 紛争転換の創造的なアイデアが出せるようになる。 2. 平和転換の創造的なアイデアが出せるようになる。 3. 実際に紛争転換、平和転換ができるようになる。

(*Conflict Transformation by Peaceful Means* (Galtung 2000)をもとに筆者が加筆修正)

『みんなが Happy になる方法』のアニメーション教材は、①②について教育効果があったと言えるが、③以降の教材開発が必要であり、紛争解決に馴染みがなく、時間が限られている大学生、社会人への教材は、導入として、あるいは想像力を助けるものとしても映像教材の開発は重要であろう。

¹² 第1の要素：紛争には当事者（パーティ）が2つ以上ある

第2の要素：当事者の達成しようとしているゴールを、それぞれの当事者において明らかにすること

第3の要素：当事者の目標に対立や矛盾があるということ

伊藤武彦（2003）『ガルトゥング平和学入門』ガルトゥング，ヨハン・藤田明史編著 pp. 18-23. 法律文化社

¹³ ガルトゥングは、平和の対立概念である暴力について、戦争や肉体的暴力などの「直接的暴力」、抑圧や搾取、文化的疎外などの「構造的暴力」、暴力を正当化する「文化的暴力」と定義した。

¹⁴ 平和については、直接的暴力がない状態を「消極的平和」、構造的暴力がない状態を「積極的平和」と定義したが、その後「積極的平和」は、直接的暴力、構造的暴力、文化的暴力のあらゆる暴力がない状態だけではなく、積極的なものを新たに創造していく状態、と定義を深化させた（ガルトゥング 2003, pp117-118）。

ガルトゥングの、平和、暴力の概念の変遷は、トランセンド研究会のHP「積極的平和について」がコンパクトでわかりやすい。http://www.transcendjapan.net/positivepeace (2015. 12. 16 最終アクセス)

おわりに

本稿では、アニメーションは、教材として、若年層から大人まで受け入れられることが示され、『みんなが Happy になる方法』は、紛争解決教育における基礎的な教育効果があったことが明らかとなった。しかし、実社会への応用についての疑問が残ることなどから、さらなる教材の開発が課題となった。

基礎的な紛争解決教育を発展させ、実生活、実社会に応用できるようにするためには、被教育者のニーズにあわせた教材が必要であり、教材も被教育者の学びとともに発展、開発されるべきであろう。このアプローチは、ステップ・バイ・ステップ・アプローチ (step by step approach: SSA) が参考になるのではないだろうか。藤掛は、開発協力において、人々の最も関心のある分野をエントリーポイントとして活動を展開し、利害関心の拡大に合わせてプロジェクトを拡大していくとし、プロジェクト評価は、対象地域の人びとの視点から評価していく必要があり、プロジェクト実施前、実施中、実施後、数年経過してといったサイクルで、対象地域の人々の協力を得て評価を行う必要がある、としている(藤掛 2003)。

数年を想定し、当事者の気づきと行動に依拠するこのアプローチは、紛争解決教育の教材開発においても有効なのではないだろうか。紛争解決教育の基礎的な理論、スキルの学びから生まれたそれぞれの疑問、意欲にあわせて、教材を選択し、被教育者の紛争解決能力をアップさせる。被教育者の経験や感想から教材の評価を行い、社会状況に合わせて、さらに教材を開発していく。それらを可能にするためには、多種多様な教材、また人々とともに育成され、改善され続けていく教材であろう。とりわけ、想像力を助け、導入しやすく、短時間で教育効果の得られる映像教材の開発は重要である。

謝辞

アニメーション制作は、虫プロダクション株式会社伊藤叡社長をはじめ、多くの人の協力と支えで実現した。また、アンケート調査に協力してくださった学校、団体にこの場を借りて謝意を表したい。

参考文献

- 池島徳大 (2010) 「ピア・メディエーションに関する基礎研究」『教育実践総合センター研究紀要 (19)』 pp. 37-45. 奈良教育大学教育実践総合センター
- 池島徳大・吉村ふくよ (2013) 「あいさつ・頼み方・もめごと解決スキルトレーニングの学級への導入とその効果に関する研究—多層ベースラインデザインを用いて—
- ガルトゥング・ヨハン著・伊藤武彦編集 (2000) 『平和的手段による紛争の転換【超越法】』奥本京子訳 平和文化

ガルトゥング, ヨハン・藤田明史編著 (2003) 『ガルトゥング平和学入門』 法律文化社
 ガルトゥング・ヨハン(2005) 「ホーポノポノ 『アジア・太平洋の平和』 (Pax Pacifica)」
 『トランセンド研究：平和的手段による紛争の転換 3(1)』 奥本京子・藤田明史・中野克彦
 訳 pp. 3-13. トランセンド研究会
 ガルトゥング, ヨハン (2014) 『ガルトゥング紛争解決学入門—コンフリクト・ワークへの
 招待』 藤田明史・奥本京子監訳 トランセンド研究会訳 法律文化社
 クライドラー, ウィリアム (1997) 『対立から学ぼう 中等教育におけるカリキュラムと教
 え方』 E R I C 国際理解教育センター編訳 社会責任のための教育者の会
 杉田明宏・いとうたけひこ・井上孝代 (2012) 「アニメ『みんなが Happy になる方法』を用
 いた紛争解決教育 大学新入生講座『アニメで学ぶ対立の解決』におけるコンフリクト対処
 スタイルの変化』『トランセンド研究：平和的手段による紛争の転換 10(1)』pp. 24-33. ト
 ランセンド研究会
 名嘉憲夫 (2011) 「紛争解決教育と平和教育の連携」『平和教育を問い直す一次世代への批
 判的継承』 竹内久顕編著 pp. 217-218. 法律文化社
 平和教育アニメーションプロジェクト (2012) 『アニメみんなが Happy になる方法 関係を
 よくする 3つの理論』 平和文化
 村上登司文(2006) 「平和形成方法の教育についての考察—中学生の平和意識調査を手がか
 りに—」『広島平和科学』 28 pp. 27-44 広島大学平和科学研究センター
 藤掛洋子編著 (2003) 『人々のエンパワーメントのためのジェンダー統計・指標と評価に関
 する考察— 定性的データの活用に向けて —』 国際協力事業団 国際協力総合研修所
 リアドン・B. カベスード.A. (2005) 『戦争をなくすための平和教育』 明石書店
 Galtung, Johan (2000) *Conflict Transformation by Peaceful Means(the Transcend
 Method) Participants' Manual, Trainers' Manual. United Nations.*